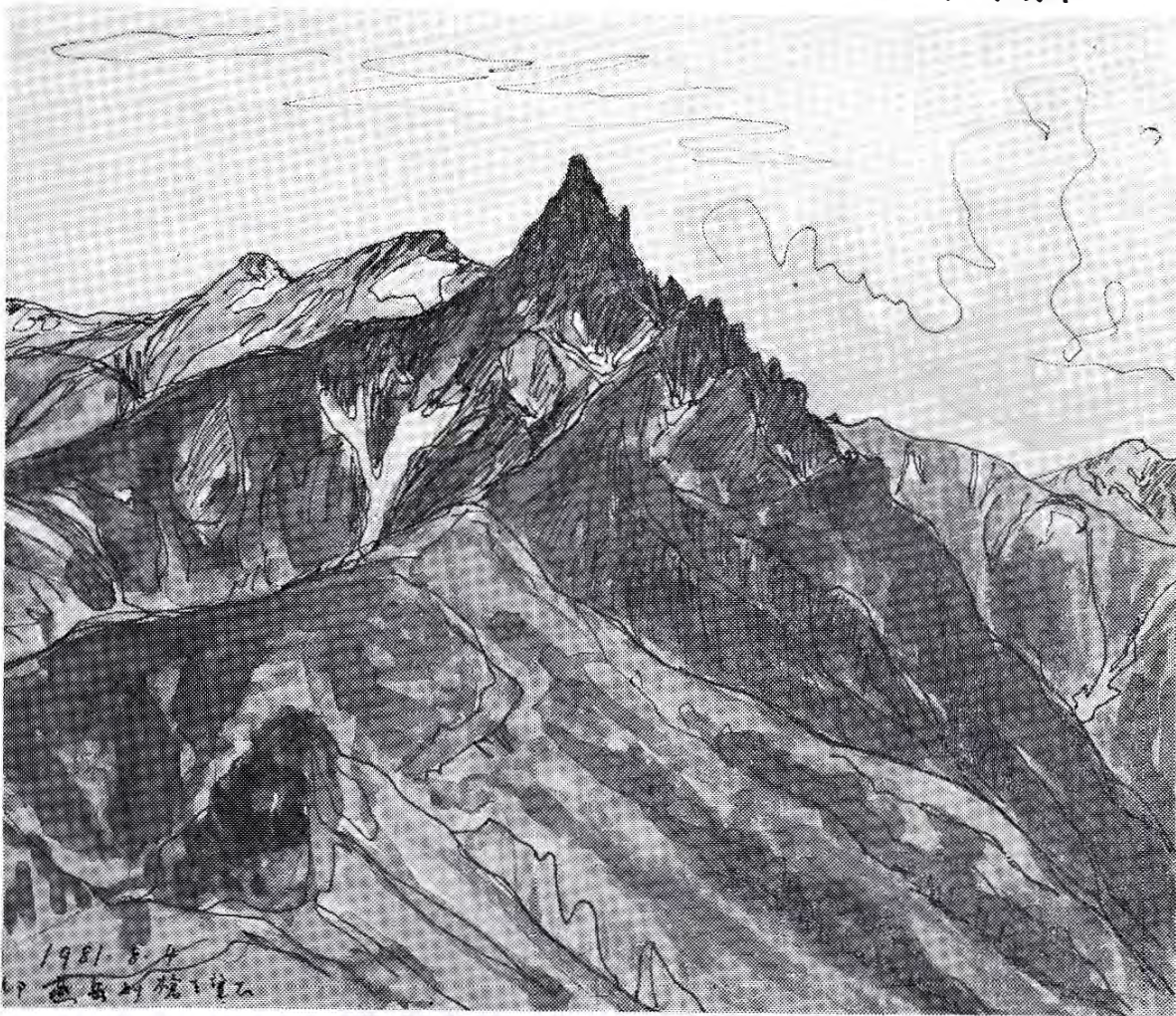


逍遙点描

—絵と文・中嶋嶺雄—



燕からの槍ヶ岳

今年も夏山シーズンとなった。多忙の日々を抜け出して年に何回か北アルプスへ行く私ではあるが、もう何年か槍ヶ岳には登っていない。私にとっての最初の槍ヶ岳は、少年の日の暴風雨のなかであった。長い単独行の縦走で持ち金を使い果たし、空腹のままようやく肩の小屋にたどりついたのに、たまたま知人の女性がアルバイトで小屋の帳場にいたために、恥かしくてそのことが言い出せず、翌朝も朝飯ぬきで上高地までフラフラになって下った。大学受験の浪人中には、友人と天上沢から東鎌尾根づたいに登って、危うく雪渓に落ちそうになったこともある。飛騨側の笠ヶ岳から重いテントを背負って登った槍ヶ岳も忘れられない。

松本の街中に育った私は、北アルプスを眺めるときにはいつも、常念岳の左側に槍の穂先が見えるかどうかを確認するのが毎日の習慣になっていた。私の現在の松本の自宅（望岳山荘）からも、槍の穂はよく見える。この表紙絵は、数年前、子供たちと常念岳に登った折に、燕岳の頂上からスケッチしたものである。

この夏は果たして槍に登れるかどうか……。

（東京外国語大学教授）

ASIA MONTHLY

東亞

1989

8

No. 266

〔中国近代化への道〕

人口問題からみた中国近代化への新たな課題

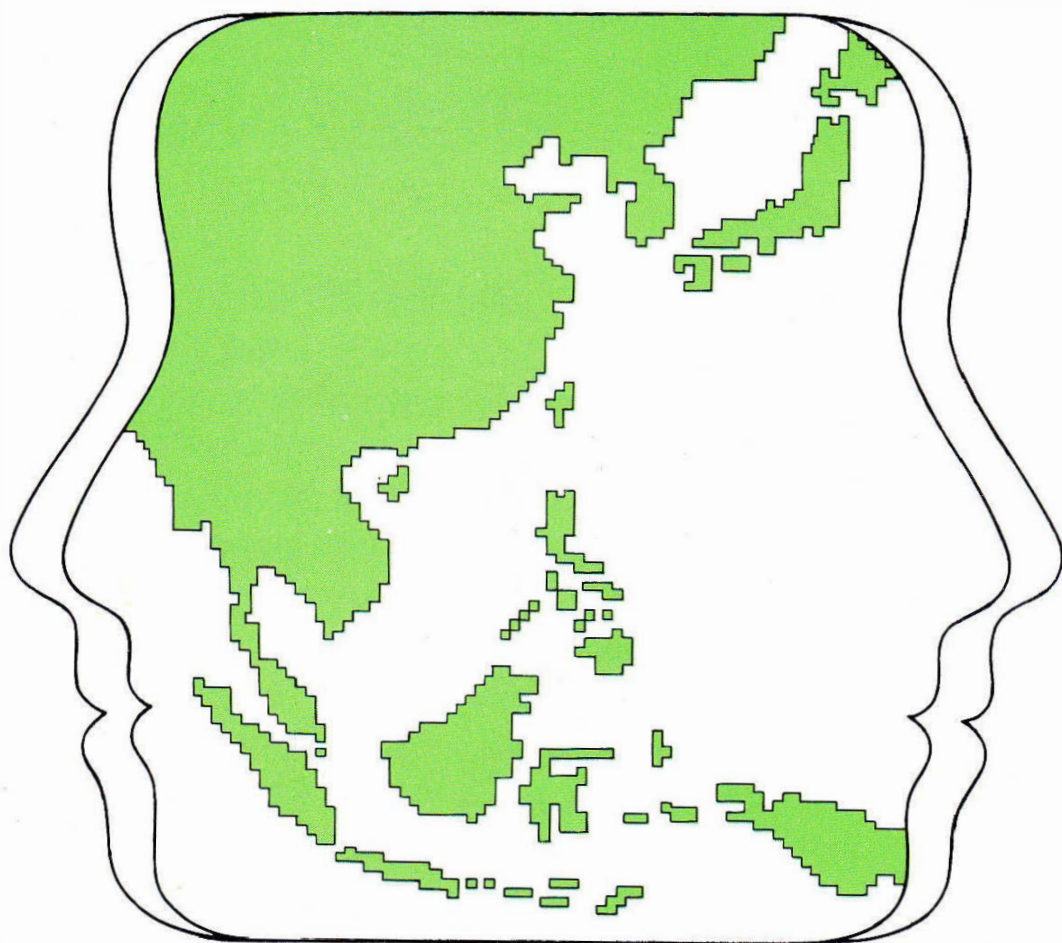
若林敬子

民主の火は永遠にわれらの中に

梁惜山

〔講演記録〕

北朝鮮の国際情勢認識とわが国の選択 伊豆見元



KAZANKAI